

好きだからこそ言う 大相撲観戦ひとりごと
～平成24年9月場所を終えた後で～

<1>新横綱誕生

大方の予想を裏切って白鵬が思いもよらぬ栃煌山に一杯を喫してしまい、日馬富士が全勝で連続優勝する結果となった。

結果はともかくとして、千秋楽に優勝をかけた熱戦が繰り広げられる状態が二場所続いたということは、大相撲の歴史を飾る大事件だった。相撲ファンとしてはこの上なく力が入る場所であった。

先場所後の駄文でも述べたように、日馬富士の大関在位中の記録は右の表のようになっている。3～4場所毎ぐらいに8勝7敗や9勝6敗が散見するという実績ゆえ、安定度の面での危惧を感じるのは私だけではなく、横綱審議委員会の委員の中にも同様の指摘をする方がおいでのようだった。

相撲協会もマスコミも「新横綱を作ろう」という空気に傾斜しすぎていたせいか、横綱を破って二場所連続で全勝優勝してしまうと、細かな点を指摘して反論することも難しくなってしまった。

もっともマスコミも一般大衆も「日本人横綱」の誕生を期待しているので、稀勢の里の活躍に大きな期待を寄せていたのではないかと、私は見ている。

そう言った空気の中で、全く横槍の入れようがない成績を収めてしまった日馬富士にシャッポを脱ぐというのが率直な印象である。

軽量力士とは言え、一昔前からの年表をめくって見ても130Kgある力士は決して軽量非力ではないと思うので、私個人が感じている懸念を払拭して大活躍してもらいたいものである。

<2>大関は6人いたが・・・

日馬富士の爆走とは裏腹に、琴奨菊・把瑠都・琴欧洲が相次いで休場

となり、15日間をフル出場した大関は三人だけになってしまった。個別の事情はともかく、6人居ても半分は役に立たなかったという惨憺たる場所であったことは否定のしようもない。

星勘定だけで行けば鶴竜は11勝を揚げて何とか大関の面子を保ったかもしれないが、前さばきと素早い動作が持ち味の彼本来の相撲は僅かしか見ることができなかった。

中日までは落ち着いた取り口を見せた稀勢の里も、豊真将のひっかけに遭って敗れた後は坂道を転げ落ちるような相撲ぶりで10勝5敗に終わった。思い通りに進まなくなった時の焦り方が早すぎるのが欠点で、これを克服しないとこれより上の番付を目指すことはできないだろう。そのためには、「これが俺の相撲だ」という型を固めなければいけない。前半戦の相撲では何となくこの壁を突き破りそうな気もしたが、続かなかった。

大関が6人もいる上に、関脇以下に星をばらまきすぎるため「次の大関候補」が生まれやすい。役にもたためない大関を乱造する今の仕組みを見直すことや、「大関の定期的な技量審査による関脇への降格」なども改革すべきテーマのひとつではないだろうか。

<3>名関脇よ来たれ

このところ小結の座はほぼ毎場所のように入れ替わっているが、関脇は境川部屋の二人が押さえ続けている。50年以上前の立浪四天王の時代を思い出す。

豪栄道は、相変わらず怪我をしたり安定しない相撲っぷりではあるが終わって見ると辛うじて勝ち越している。器用さや綱渡り相撲で星を稼いでいる感じがするし、みっともない負け方も多い。

かたや妙義龍は、攻めても守っても低い姿勢が保たれていて安定感がある上に、最後まで勝負を諦めない粘

H21-1月	8勝 7敗	新大関
H21-3月	10勝 5敗	
H21-5月	14勝 1敗	優勝
H21-7月	9勝 6敗	
H21-9月	9勝 6敗	
H21-11月	9勝 6敗	
H22-1月	10勝 5敗	
H22-3月	10勝 5敗	
H22-5月	9勝 6敗	
H22-7月	10勝 5敗	
H22-9月	8勝 7敗	
H22-11月	0勝 4敗 11休	
H23-1月	8勝 7敗	
H23-5月	10勝 5敗	
H23-7月	14勝 1敗	優勝
H23-9月	8勝 7敗	
H23-11月	8勝 7敗	
H24-1月	11勝 4敗	
H24-3月	11勝 4敗	
H24-5月	8勝 7敗	
H24-7月	15勝	優勝
H24-9月	15勝	優勝

りもあり豪栄道にはない安心感がある。これは積み上げた稽古の賜物で、「相撲の基本」が身に付いていることを強く感じさせる。関脇の地位を守り、しかも10勝5敗で再び技能賞に輝いたのは立派である。マスコミはすぐに「次の大関候補」と騒ぎたがるが、私の見解としては大関候補となる前に「まずは名関脇になれ」である。その先のことは騒がずとも結果として付いてくる。妙義龍にはその可能性が多分にあると私は見ている。

<4> 若手力士から目が離せない

隠岐の海がようやく自分の相撲で走り抜ける糸口をつかんだように見えた。これが本物か否かは来場所を見ればわかる。基本に拘った技能相撲にはまだもう一步と言う感じで、11勝4敗ながら三賞の選考から漏れた。ここ二場所低迷が続いていた高安が復調した。速い攻めと変貌自在な相撲で10勝5敗を揚げたが、千秋楽に舂ノ山に敗れたため敢闘賞を逃した。「千秋楽の勝ち」を条件とした選考基準に首を傾げたい。しかし来場所以降に繋がる復調ぶりを感じさせたので、これからが楽しみな力士である。

旭日松・舂ノ山の一直線で元気いっぱいな相撲は気持ちが良い。大勝ちこそしなかったが、着実に上に向かっていく感じがする。一点の負け越しとなってしまった松鳳山とともに「真面目な相撲」「真剣な相撲」「全力投球の相撲」「前に進む相撲」といった良いイメージが溢れている。こういった基本がしっかりとした若手力士が出てくるということは大相撲の将来は決して見捨てたものでもないと思う。十両上位で好成績を収め、来場所の入幕が予想される千代の国・常幸龍・勢なども含めて新旧交代の予感がする昨今である。

<5> ベテラン力士も活躍

若手の台頭が目立つ中でベテラン力士の活躍も目を引いた。先々場所同様に優勝戦線にからむ活躍をした旭天鵬は場所中に38歳を迎え、この場所で通算814勝を達成し相撲史に残る力士の仲間入りをした。

肌の色つやといい張りといい、まだまだ続けられそうな感じがする。十分な稽古の結果がもたらした記録と言える。また、負け越してしまいはしたが36歳の若の里も通算805勝を達成した。

安美錦の相撲は相変わらず面白い。鋭い出足、突き押し、前さばき・土俵際の逆転・・・様々な見せ場を作ってくれる上にインタビューで自分の相撲を念入りに解説してくれるのが面白い。その日その日の対戦相手に関する研究が行われており、相手の強みと弱みをきちんと掌握した上での作戦は興味深い。こういう人が解説者になるとわかりやすくても良いかもしれないが、まだ現役力士として活躍していて欲しい力士である。この他にも粘っこさが戻って来た朝赤龍、負け越しはしたが雅山などが場所を面白くしてくれた。

<6> 行事の仕事の質を高めよ

相変わらず立ち合いが乱れていた。行事の声に反応して手をきちんとつく力士が余りにも少なすぎる。これは「手つきの定義」が明確になっていないことに起因していると感じている。

「両の手を土俵上を下して仕切った上で立ち上がる」「片方の手だけを土俵上を下して仕切り、もうひとつの手をチョンと土俵上に接触させただけで立ち上がる」などなど様々な立ち合いのしかたが存在している。白鵬・妙義龍・豊真将・松鳳山などのように両手を下して立ち上がるタイプの力士は相撲内容もしっかりしているが、琴奨菊に代表される「チョン着き立ち合い」の場合は、自分もしくは相手力士の「待った」が発生しやすい上に相撲内容も貧弱である。

さらに、この立ち合いの不具合をその場で指摘すべき「土俵の指南役である行司」の力量に個人差があることもテレビ画面を通じて見えてきた。

基本を大事にする力士の台頭が目立つようになってきた昨今、「立ち合いの正常化・清浄化」という大きな課題に取り組む好機だと思うが、いかがか？

<7> 相撲放送の解説

NHKのレギュラー相撲解説者として北の富士・舞の海の二人があたっているが、時々他のメンバーが登場することがある。

相撲解説の面白さは、相撲の技術を熟知していることもさることながら「アナウンサーとのやりとりがスムーズに行われる」ことも必要になる。これらよりもさらに重要なことは「聞き手にわかりやすい話し方ができる」ことである。テレビ画面に登場する解説者の方々の中には「この人は解説には向かない」と感じられるような人も少なくない。

この場所に登場した解説者の中で気になったところをワンポイント辛口コメントをしてみたい。

九重（元横綱千代の富士）、八角（元横綱北勝海）の解説は聞き取りやすい声で、しかも内容も豊富で面白い。伊勢ヶ浜（元横綱旭富士）の話は、さすがに技巧派力士らしく技術的コメントは面白いし素晴らしい。しかし、ボソボソした喋り方でしかも声が小さく聞き取りにくいし、アナウンサーとの応酬の間に沈黙の時間があることがある。どちらかというとな解説者には不向きな感じがした。

玉ノ井（元大関栃東）の解説も元技能派力士らしい興味深い解説が多いが、アナウンサーとの応酬がスムーズでないことがある。会話とやりとりのリズムと土俵上の制限時間を意識した喋り方はまだまだこれからという感じがする。

貴乃花の解説はアナウンサーの質問に答えるだけのことが多く、「独自の話の膨らませ方」が足りないため興味深い話にならない。また声も小さいので迫力がない。現役時代にインタビューを受けても積極的に応えない力士だったのがわざわざしているのだろうか？

音羽山（元大関貴ノ浪）は声の質も良いし、はきはきと歯切れよく喋るので聞きとりやすい。現役時代の相撲の型が両脇をガラ空きにして取る「引張り込み型の腕力相撲」だったせいか、基本的な相撲技術に関するコメントが少ないのが難点。

谷川（元関脇北勝力）も、相手に合わせない自分勝手な仕切りと立ち合い、叩くことを前提とした突き押しなどの、どちらかと言えば非正統派の力士だった。いざ解説に回ると意外なほどに細かな相撲技術に触れたコメントをするので耳障りな感じはするが、この違和感が面白いと言えば面白い。

稲川（元小結普天王）は現役時代のきびきびした前進相撲を感じさせる語り口で、聞き取りやすく内容も豊富で面白い。現役時代に自分のブログを持って、自ら情報発信を行っていたせいか「人に聞かせる話」の作り方を知っているように感じる。喋りすぎで時には煩く感じる舞の海の解説よりも好感を感じる。

このほかにも多くの親方や角界に精通した著名人がゲスト解説者として登場することがあるが、放送の中での解説となると、誰でもできるということにはならない。

「NHKさん、なんでこんな人呼んだの？」というようなことがないように、お願いしたい。

<8> 横綱土俵入り

と言うような訳で新しい横綱が誕生することになった。

新横綱日馬富士の土俵入りは師匠（元旭富士）と同じ不知火型。東西の両横綱が同じ不知火型と言うケースはこれまでにないことである。観客は不知火型を二つ見ることによって、不知火型の美しさを知り、両力士の土俵入りの違いを知り、相撲の違いをも知ることができる。又とない機会が得られることになった。

これまで白鵬の土俵入りでは伊勢ヶ浜部屋の安美錦が太刀持ちを勤めていた。来場所からは自分の部屋の横綱の太刀持ちを勤めることになる。

日馬富士の明治神宮への奉納土俵入りは、太刀持ち安美錦、露払い宝富士と伊勢ヶ浜部屋の力士で固めた。来場所からの白鵬の土俵入りを添える太刀持ちと露払いは誰になるだろうか？太刀持ちはこれまでも経験のある旭天鵬になると思うが露払いは？

横綱土俵入りは、来場所からの見所のひとつになるに違いない。

以上